

SICORP

「新たな国際頭脳循環モード促進プログラム」事後評価報告書

1 共同研究課題名

「ソフトウェアエコシステムに潜むプロテストウェア検出のための AI 技術」

2 日本ー相手国研究代表者名（研究機関名・職名は研究期間終了時点）：

日本側研究代表者

ラウラ・ガイコビナ クーラ（奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 情報科学領域 助教）

オーストラリア側研究代表者

クリストフ・トロイデ（メルボルン大学 コンピューティング&情報システム学上級講師）

3 研究概要及び達成目標

オープンソースソフトウェアは、今日のソフトウェア開発において大変重要な役割を担っているが、その影響力を利用するプロテストウェア（特定の抗議を目的とした悪意あるコードや動作が組み込まれたソフトウェア）への懸念が高まっている。本研究の目的は、プロテストウェアが社会全体に及ぼす影響を検知・理解する手法を、AI 技術を結集して実現することにある。豪州の研究グループに研究者（博士後期課程）を派遣することで、プロテストウェア検知・理解に向けたデータ処理やモデル構築を推進し、新たな検知・理解モデルの構築や知見の蓄積を加速させるとともに、研究者ネットワークの強化を図る。

4 事後評価結果

4.1 研究成果の評価について

4.1.1 研究成果と達成状況

ソフトウェア開発者の責任に関する研究を行い、派遣された 2 名の大学院生を共著者とする論文を纏め、投稿に至ったことは成果である。ただし、多くの開発者とリポジトリを含むデータ解析を行ったが AI 利用についてはより明確な成果を期待する。メルボルン大学との連携に学生を組み込むことができたことと推測されるが、具体的な学生の寄与についての記載が望ましい。他方、博士課程前期学生が後期に進学するモチベーションを得たことは、派遣の成果として評価する。

4.1.2 国際共同研究による相乗効果

当初計画していた開発者の直接インタビューが出来なくなったことによって連携先を広げる必要ができた。プランニング時の綿密さが求められるが、却って手法が広がった益はあった。

4.1.3 研究成果が与える社会へのインパクト、我が国の科学技術協力強化への貢献

ソフトウェアの性格を自動判定する技術への貢献に期待する。

4.2 相手国研究機関との協力状況について

特になし

4.3 その他

特になし